

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

夢解釈の方法：芥川龍之介「夢」の解釈

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): 芥川龍之介, 夢解釈, 母性, 哲学的解釈学, E.H.エリクソン キーワード (En): AKUTAGAWA Ryunosuke, Interpretation of Dream, Motherhood, Philosophical Interpretation, E.H.Erikson 作成者: 荒木, 正見 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000119

著作権は本学に帰属する。

夢解釈の方法 —芥川龍之介「夢」の解釈—

Methodological thought on interpretation of dream, taking AKUTAGAWA Ryunosuke's
“Yume (dream)” as an objekt of study

荒木 正見

Masami Araki

日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International college of Nursing

要約

小論は夢解釈の方法を、芥川龍之介晩年の短編「夢」（昭和元年）に即して実際に遂行する試みである。すなわち、作品「夢」の構成に着目しつつ分析し、その隠されたテーマに母性に対する作者の屈折した思いがあることを読み取る。その方法は「夢」というキーワードに着目して、全体の解釈を哲学的解釈学に基づき、夢を解釈する手法を挿入しつつ、文学解釈本来のテキスト解釈、特にこの場合は、ストーリーにおいて相互に絡み合う夢と現実との双方の接点にある、モデルを殺す夢の背後の、原初的な母性に対する憧れを読み取る。そして、捨て子体験を持つ芥川龍之介が、その生育史において特に最も始めに出会わなければならない母親性と出会えなかったことが、母性に対する強い憧れと、自分と世界全体の存在に対する深刻な疑いを生じ、結果的に自殺に至ったことを明らかにして、文学的手法の一典型である生育史に基づく解釈へと橋渡しをする。

Key Words

芥川龍之介	夢解釈	母性
AKUTAGAWA Ryunosuke	Interpretation of Dream	Motherhood
哲学的解釈学	E.H.エリクソン	
Philosophical Interpretation	E.H.Erikson	

本旨

夢解釈の方法 —芥川龍之介「夢」の解釈—

荒木正見

序

小論は夢解釈の方法を、芥川龍之介晩年の短編「夢」（昭和元年）に即して実際に遂行する試みである。使用テキストは芥川龍之介「夢」、『芥川龍之介全集 第二十二巻』¹である。なお、芥川龍之介全集の他の巻も含め、引用中の旧かな、旧漢字は現在のものに直した。また、外国語文献に関しては拙訳を記した。

筆者は先に拙著『人格発達と癒し —昔話解釈・夢解釈—』²において、哲学的解釈学に基づく夢解釈の方法について概説した。小論はその具体的解釈例であるが、その後の筆者の研究を加えて考察することは言うまでもない。

さて、結論的なことを先に述べれば、小論は、作品「夢」の構成に着目しつつ分析し、その隠されたテーマに母性に対する作者の屈折した思いがあることを読み取るものである。

このように小論では、「夢」というキーワードに着目し、夢を解釈する手法を挿入しつつ、文学解釈本来のテキスト解釈や生育史に基づく解釈へと橋渡しをするが、それは次のような理由に基づく。

まず、夢が個人にとってきわめて重要なものであることを述べておかねばならない。河合隼雄『母性社会日本の病理』では、ユング心理学を取り入れて「古代人たちは、その体験を心におさめるために神話をもった。概念的な認識ではなく、古代人がその全存在を関与せしめて新しい事実に接したとき、それは神話によってのみ心の中に基礎づけられていたのである。」と、古代人にとって神話が全存在の体験の記憶であることが述べられ、さらに「夢は個人の神話であるといわれる。」と、夢が個人の全存在にとっての意味を持つことが述べられている³。まさに夢はこのような意味で個人の全体を象徴しているものだとと言える。

さて、この作品は表題「夢」、また、その最後に、現実だと思っていたこともすべて夢だったのではないかと思い、「今何か起れば、それも忽ちその夢の中の出来事になり兼ねない心もちもした。……」⁴と述べられるように、一貫して、夢を意識して表現されている。

それは、第一に、夢の不思議さに寄せて物語に不思議なイメージを与えようとする意図があることは言うまでもない。

そして第二に、その不思議さがテーマを導くのであるが、テーマへと至る道筋に夢という仕掛けが横たわるのであるから、夢という仕掛けを解きほぐしつつ解明することもひとつの方法として有効であると思われる。

しかし反面、このような方法は時として、夢解釈のような象徴解釈の陥りやすい危険性

と隣り合わせであることも自覚しておかなければならない。

事柄を象徴として解釈するということは、以下のように象徴 (Symbol) を規定すれば、すべての事柄について行っていることである。

筆者はかつて拙著『現象として的人格発達』において、象徴を次のように規定した⁵。

象徴とは、ホワイトヘッド (A.N.Whitehead) が、*Symbolism -Its Meaning and Effect*⁶ で、象徴作用 (Symbolism) と述べるように、ひとつの認識態度である。すべての事柄がそのような認識対象になり得るが、その場合、次のような性質が成立している。

1) 代理表象性

象徴とは、何かそのものではなく、何かを代理表象しているものである。

2) 多義性

芸術表現などを考えれば明らかなように、ひとつの象徴の意味は、多義的であり、無限に存在する。

3) 体系性

無限の意味のどれを選ぶかはでたらめではなく、或る意味を選んだ時には、その意味が矛盾なく成立するための体系的地平をも選び取っている。従って、象徴解釈においては、どの体系的地平において意味を決定しているのかを確認しなくてはならない。

夢解釈の方法は、このような象徴解釈の前提の上に成り立っているのであり、それゆえに、夢解釈の方法を確認しつつ、実際の夢解釈を遂行しなければならないのである。

1. 物語の構成

筆者が先に述べたように (『人格発達と癒し 一昔話解釈・夢解釈一』⁷)、夢解釈の際には次の三側面を考慮しつつ解釈する。

1) 「夢を見ること」に付随する側面。

2) 夢に示される象徴的意味を見出す側面、すなわち夢の構造的解釈の側面。

3) それらすべてを統合する論理的整合性の側面、もしくは夢解釈の実践的側面。

すなわち、1) は、生理的な側面で、夢を見る時とされるREM睡眠期からより深い、いわば全くの無意識であるNON-REM睡眠期へと落ち込む時に見るとされる別世界に入り込んだり、穴に落ちたりする夢などや、現実や環境の反映などがこの夢に当たる。

そして、2) と3) に共通していることは、構造や論理に着目すべきことである。川寄克哲『夢の読み方 夢の文法』では、「夢は「関係」しか示さない。」と述べられ、また、「じつは夢は、これらのことがらやそれらから構成されている全体を通して、内容ではなく、なにかの「関係」を指し示しているのである。」と述べられるが⁸、現れる具体的事柄を現実的な事柄と同等に思わずに、むしろ構造や論理に着目すべきことが重要である。

従って筆者は、解釈という論理的な作業を目的として、論理構造に着目しつつ、象徴的意味を読み解いていく方法を述べた。

従ってまず、構造的手がかりを得るために、物語の構成を主人公の行動の流れとして確認する。

作品「夢」の構成

- ① 主人公である画家は、憂鬱から逃れるためにひとりのモデルの女性を雇い、十号くらの人物画を描き始める。
- ② モデルは、顔はあまりきれいではないが、体、特に胸は立派だった。彼女は表情らしいものを示したことはなく、言葉も声も一本調子である。
- ③ 画家は休みなく画架に向かい、彼女も毎日通ってきていた。
- ④ 画家は彼女の体に圧迫を感じ始めた。
- ⑤ さらにまたある日、いよいよ彼女の体に野蛮な力や、腋の下などの匂いを感じ始めた。
- ⑥ やがて、彼女の乳首が大きくなってきているのに気づく。
- ⑦ ある朝、画家は彼女を絞め殺す夢を見て目覚める。
- ⑧ その日も翌日も、彼女は来なかった。自分が本当に殺したのではないかと不安になる。
- ⑨ 彼女を雇っている主人から聞いた家を訪れるとおとといから帰っていない。
- ⑩ 画家は、この物語の一連のことすべてが夢ではなかったかと思う。

この流れから、この作品は、夢は二重の仕方で構成されていることが分かる。すなわち、この物語のすべてが夢ではなかったか、と、全体を包む夢構造と、彼女を絞め殺す夢と殺したのは現実だったのかもしれないと対比される物語中の夢である。この物語中の夢は、「いろいろの夢を見がち」や「色彩のある夢」⁹と述べられたり、線香花火をしているつもりで畑の「葱を火につけていた」¹⁰と述べられたりするような形で、夢見がちな主人公の性格を強調されるエピソードにもなっている。

そしてこの作品は、夢という非現実と、現実とを交差させて、一種の不思議な感じを醸そうとしている構成をし、認識や存在の不確かさというテーマへと導いている。

従ってさらに、その交差を確認し、作者が絞り込んでいるテーマの奥に示されるものを明らかにすれば、さらにその不思議な感じの意味、すなわちこの物語のより深いテーマが見えてくるのではないかと思われる。

2. 夢としての「夢」

さて、先に瞥見したように、一方で作者はこの物語全体が夢なのではないかというよう

に思わせるべく、伏線を敷く。

1節①の前、序にあたる冒頭部分では「わたしはすっかり疲れていた。(中略)不眠症も可也甚しかった。のみならず偶々眠ったと思うと、いろいろの夢を見勝ちだった。」¹¹と、一種病的な夢見者(dreamer)たることを示しているし、それに続く箇所には憂鬱ながら憂鬱な景色に癒されるという病的な状況を表現している。

それから①になるのだが、制作欲は憂鬱から逃れるため、なのである。ここにも、悪夢に繋がるような伏線を敷く。

⑦で、殺害した夢を見た後に挿入されるエピソードは、子供の頃、線香花火に火をつけているつもりで、畑の葱に火をつけていたというものである。ここでも、夢と現実の区別が付かない癖を提示する。

そして⑩になるのだが、彼女の存在がまるで夢のように不確かなのである。「ふといつか夢の中にこんなことに出合ったのを思い出した。」¹²として、彼女を訪ねていった風景がすべて「何箇月か前の(或は又何年か前の)夢の中に見たのと変らなかった。」¹³と予知夢の可能性までも重ねられている。そして夢解釈でも重要なラストシーンでは、「わたしはその夢の中でもやはり洗濯屋を後ろにした後、こう云う寂しい往来をたった一人歩いていたらしかった。」¹⁴と孤独な状況が描かれる。このラストシーンの意味こそが小論の考察の重要な手がかりだといえるが、それは後に考察する。

3. 現実としての「夢」

さて、先に述べたようにこの物語は全体が夢かもしれないという仕掛けもあるが、読者に対して現実、もしくは真相はこうなのだという事実が分かるような仕掛けも為されている。

結論を先に述べれば、彼女の失踪は妊娠および出産のためである。

1節②の後で、画家は彼女に住んでいる場所を聞く。彼女は「谷中三崎町」と答え、「お友だちと二人で借りているんです」¹⁵と言う。ここでは、一緒に借りているのが同性か異性かはわからないが、⑨では、「本郷東片町」に住んでいるが、家を空けると一週間も帰って来ないという言葉を入れて、本来は「本郷東片町」に住んでいながら「谷中三崎町」に入り浸っていることが暗示されている。

そしてその間に入っているのが、②④⑤⑥などで示されるような彼女の肉体上の変化である。この一連の変化が暗示しているのは、妊娠であることはいうまでもない。

さらに⑦の直前、彼女は路地に敷いてある「胞衣(えな)塚」の話をする。そのことに触れることで、彼女が出産に関心があることがわかる。

彼女の肉体上の変化と、この「胞衣塚」のエピソードは読者の意識の中で共時的に影響

しあって、彼女が妊娠しているという現実的な事実を伝えている。

「谷中三崎町」で一緒に住んでいるのが男だとすると、また、彼の子供を身ごもっていたとすると、彼女の一貫してそっけなく挑戦的な態度も説明が付く。

すなわち、この物語は、一方で出産のために黙ってモデルをキャンセルした女性がいて、それに翻弄される画家がいるという構図がある。

4. 夢と現実の交差

さて、この小説の面白さは、そのような形式的トリックだけにあるのではない。作者芥川龍之介は例えば「南京の基督」(大正9年)のように、一方で敬虔な信仰による救いを見せておいて過酷な現実を提出することで主人公の悲しみと人生の残酷さというモチーフを作り上げたように、二つの物語の流れを交差させることで、テーマを表現する技法を有する。この小説も、まさにその交差点に手がかりがあると言えよう。

その交差点は⑧で示されるように、彼女を殺した夢が現実であったのではないかという点にある。

よく考えてみると、殺したのならそこに死体があり、探しに行くことなど起こりえない。にもかかわらず、彼は真剣に、殺したのではないかと疑い、探索にまで出かけるのだから、彼女の死は、彼の内面の問題だということが分かる。そこで、当然、この物語全体が夢なのではないかと疑うことになる。まさにそうなのである、すなわち、やはりこの物語の全体は夢である。

では、夢の中で死んだのは誰なのか。

これが夢として表現されていることに着目して、夢として解釈してみると次のような手がかりが得られる。

夢解釈の方法としてこれまでのところは、構造=関係に着目して焦点を絞ってきたが、絞られた焦点に従って、ここで、象徴的テーマという内容に立ち入ることになる。

その内容は当然「死」の意味である。

「死」の象徴的意味は、例えば、Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* で、「或る時期 (epoch) の終わり、不死を得る意味」などと述べられるように¹⁶、発達が終わってしまうという意味があることも事実である。これに対して、河合隼雄『ユング心理学入門』では、「心像の世界における「死」は「再生」へとつながるとき、むしろ劇的な変化の前ぶれを示す」¹⁷とされ「大きい人格変化を生じてきたときに、死の夢をみることがある」とも述べられ、「死と再生」のモチーフが、人格発達の契機を意味することが述べられている。

夢解釈において「死」のモチーフが現れた場合、当然この双方の意味を考慮しなければ

ならないが、この作品の場合にはどのように解すればよいのであろうか。

『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』で、筆者は「主語に囚われるのではなく、述語による理解を軸にする」¹⁸ことを述べた。それは、構造＝関係に着目する方法である。すなわち一般的に夢の物語では、登場人物に目を奪われがちであるが、『夢の読み方 夢の文法』でも述べられるように¹⁹、名詞として現れるものは夢の場合極めて比喩的である。これは、先に述べた意味で、象徴的といってもよい。その意味を辞書的に確認しようとするときはシンボル（象徴）事典類を検索することになるが、シンボル事典は、本来、一度でも用法があれば重要さとは関係なしに列記しなければならないのである。なぜなら、先に述べたように、象徴とは多義性を持つからである。従って、名詞が本当は何なのかを確定するためには、それが世界全体とどのような関係においてあるのか、もしくは、どのような体系の上に存在しているのかを考察しなければならないが、それは、述語を分析することで明らかになるのである。

ここで、主語は、殺された女と殺した主人公、との二人である。

殺されたモデルの女の述語は、「やや顔を仰向け、やはり何の表情もなしにだんだん目をつぶって行った。同時に又彼女の乳房はまるまると綺麗にふくらんで行った。」「彼女はとうとう目をつぶったまま、如何にも静かに死んだらしかった。」²⁰、そして、その日も次の日も彼女は来なくなり、そのまま失踪するのである。

一方、殺す主人公の述語は、「この部屋のまん中に立ち、片手に彼女を絞め殺そうとしていた。」「彼女を絞め殺すことになんのこだわりも感じなかった。いや、むしろ当然のことを仕遂げる快さに近いものを感じていた。」、そのあと「妙にわくわくする心もちを抑え、モデルの来るのを待ち暮らした。」「わたしの部屋の障子の外へ出る、一そんななんでもないことさえわたしの神経には堪えられなかった。」「わたしは部屋の中を歩みまわり、来るはずのないモデルを待ち暮らした。」、そして、線香花火と間違えて葱に火を点けていた記憶を呼び起こし、彼女を絞め殺したことが「夢の中でなかったとしたら」と不安になるのである。そして、このモデルを派遣した主人を訪ねて居所の洗濯屋を聞き出すが、それは彼女自身が言っていた所とは異なり、そこに彼女は二日前から帰っていない。彼はそこを後にしつつ、この町に彼女を訪ねていったことのすべてが「何箇月か前の（或は又何年か前の）夢の中に見たのと変らなかった。」と感じ、さらに「その夢の中でもやはり洗濯屋を後ろにしたあと、こういう寂しい往来をたった一人歩いていたらしかった。」と思い、先にも引用した「今何か起れば、それも忽ちその夢の中の出来事になり兼ねない心もちもした。……」²¹という終結へと向かうのである。

夢の中での、夢と現実の交差というこの場面から示唆されるものは多い。以下、それを考察する。

まず、殺された女であるが、いずれにせよ殺したのは作者、芥川龍之介である。本当に

このような夢を見たのか、それとも創作上の仮構かは不明だが、彼の意識無意識の全体が殺したことはいうまでもない。先の象徴的意味を考慮すれば、何かが終わったことになる。

述語的に確認すれば、乳房に関する記述が特徴的である。筆者は『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』において、テーマの反復に着目すべきことを述べた²²。すなわち、「夢全体のストーリーをテーマの固まりの連続として構造的に分解してみる。」すると「あるテーマがさまざまに姿を変えていることに気付く」ことになるのである。この物語の構成においては、その点分かりやすく胸の記述が連続している。1. ②で示されるように、彼女についての第一印象から、胸に着目し、その変化について段階的に記されているのである。つまり、ここで死んだ彼女の最も重要な要素は、胸＝乳房であることになる。

象徴的意味だけにこだわれば、それは性的な要素や母性など、多義的であり、すぐさま、赤信号＝止まれ、のように直接的な解釈をしてはならないことは明らかである。そこで、述語的意味や全体の構造的流れ、などを確認しつつ解釈を進める。

発達した乳房が死んだというこのことは、夢解釈などの象徴解釈の手法に照らして言えば、作者にとってそれがいらなくなった、もしくは内面的に統合され、いわば、無意識的に納得したり諦めたりしたという事を意味する。

この場合、夢解釈にとって重要なのは、筆者が『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』において「人格発達、すなわち統合に必要な条件が、本人にとって未だ遠いものである場合には、それは単純に恐怖となって現れる。」²³と述べたように、感情が重要な手がかりになるということである。すなわち、上記の内面的な統合が進行している程度やその質が、感情へと表出すると考えられる。

先に述べたように、彼女の死は静かだった。また、殺す彼のほうも、当然のことを仕遂げる快さを持っていた。ということは、この死は、作者の中で統合が進行していることを意味している。平たく言えば、何かを納得していると言える。

さらに、主人公の行動から、その意味を深めることが出来る。

彼女を殺した夢を見たあとに、彼は妙にわくわくする気持ちを抑えて彼女を待つ。このことから、ここで起ころうとしていることは「死と再生」のモチーフであることが分かる。しかし、その後の展開から、再生は十分には叶えられなかったことも明らかになる。再生が十分に為されていれば彼の前に何かが発達した姿で現れるはずであるが、彼女はそのまま失踪する。その現実的理由は先にも述べたように、妊娠、出産であると示唆されているが、主人公の寂しげな感情は、夢見る作者にとっては再生が得られなかったことを意味している。

では、彼の中で死んだものと、再生出来なかったものは何だろうか。

死んだものは、それまでの彼女の変化の方向性、すなわち妊娠と出産であることはいうまでもない。主人公はそれを敏感に感じ取り、そのことを表現出来ない苛立ちを抱き、古

代型の武器による原初的な殺意を抱き始めている。つまり、ここで死んだものは「母たること」すなわち「母性」であると考えられる。

では、再生しなければならなかったのは何だろうか。

それは、その後の主人公の行動から推測される。

彼は、彼女を本当に殺したのではないかと不安になって、彼女を探しに行く。つまり、母性をもう一度求めるのである。しかし、彼女は見つからない。この母性の喪失と、物語のすべてが夢ではないかと考え、存在の不確かさに寂寥を覚えることが、底で繋がっていることを、作者は暗示し、読者もその感情に引き込まれて作品は終わる。

この感情を、あえて心理学的に確認すれば、象徴解釈や心理療法などで広く用いられ、今日の発達心理学の基盤をなすエリクソン (E.H.Erikson) の考察が参考になる。主著、*Identity and the Life Cycle* によれば、人格は生涯を通して発達し続け、発達の各段階においてその段階において克服しなければならない課題があり、それが克服されなければ特有の危機として生涯現れ続けると述べられる²⁴。その各段階は、同書によれば、八段階に分けられる。その第一段階が、「生後一年の経験から獲得される自己自身と世界に対する基本的態度」すなわち「基本的信頼感 (sense of basic trust)」を得る時期だとされる²⁵。さらにこの時期を順調に過ぎ、基本的信頼感を得るためには母親の影響力が大きいとされ、「乳児は口を通して生存し、口によって愛する。また、母親は乳房を通して生き、乳房によって愛する。」²⁶と述べられるように、母親の乳房が重要な役割を果たすとされる。このように、エリクソンは自己自身と世界に対する基本的信頼感が、母親の乳房を通して培われることを述べるが、一般的な感覚でもそれは納得出来ることである。

作者は主人公と一体化して、妊娠し母らしさを感じさせ始めるモデルに母性を感じ始める。それは主人公にとって終始魅力的ではあったが、一方で圧迫感を与え苦痛に感じることもあった。彼女が、出産さえ暗示し始めたとき、主人公と作者は、その母性を超越すべく、夢で殺害する。そこで本当に超越し、必要な人格発達を遂げたのなら、エネルギーが満ちる兆しが表現されるはずであるが、実際には、存在そのものの不確かさへと寂しく導かれていくのである。

このような、母性への憧憬と、それを抹殺することで乗り越えなければならない宿命と、そして永遠に得られることのない存在そのものに対する負の信頼感とが重なるとき、当然、作者芥川龍之介が浮かび上がってくる。次節では、その点を検証する。

5. 捨て子体験と癒し

小論では、作品「夢」に即して、その夢性に拠りつつ、テーマの奥に窺われる作者の深層を考察してきた。そして、乳児期における母親との関係に、不幸な影を感じるところま

で行き着いた。では、実際、芥川龍之介の乳児期はどうだったのだろうか。

筆者はかつてこの点について、芥川龍之介「蜘蛛の糸」にみられる絶対的なニヒリズムの根底に関して、乳児期の子捨て体験の影響を論じたが（拙論「芥川龍之介と親鸞 — 『蜘蛛の糸』の親性をめぐって—」『比較思想論輯 —比較思想学会福岡支部紀要— 第5号』²⁷⁾、小論も同様に子捨て体験に深層の問題を帰着させざるを得ないであろう。

すでに古典となった吉田精一『芥川龍之介』では、その間の事情を「父四十二歳、母十三歳のいわゆる大厄の年の子である。そこで旧来の迷信から、捨子としての形式を踏むことになった。（中略）よし形式的にもせよ、彼は一応親から捨てられたのである。出生の第一歩にあたって、暗い影をすでに落し初めたかにもみえる薄倖な彼の運命（ほし）は、生後一年足らずの内に、幼児としての最大の不幸を宿すことになったのである。それは彼の母の発病であった。」²⁸⁾と述べられている。この母の発病は、龍之介の生後九カ月頃からの精神障害を意味する。関口安義『芥川龍之介とその時代』では、その事情を「前年の長女ハツの死、厄年の龍之介の誕生、兄道徳の急死のショック」それに夫敏三の放蕩などが重なったものと推測している²⁹⁾。このような複雑な事情から、当時の医療環境もあって、芥川龍之介は、その幼児期において母親の乳房に親しむ機会を失ってしまったと言える。

『芥川龍之介』にも引用される「侏儒の言葉」（大正12～14年）の一節「人生の悲劇の第一幕は親子となったことにはじまっている。」³⁰⁾は、親に対する不信の表現として知られるところであるが、その直前の「親は子供を養育するのに適しているかどうかは疑問である。」³¹⁾や「子供に対する母親の愛は最も利己心のない愛である。が、利己心のない愛は必ずしも子供の養育に最も適したものではない。」³²⁾等のような、親というものに対する醒めた視点はまた、彼自身の寂寥に跳ね返ってくる。

もちろん、同様の境遇を持つ人間がすべて同じ心理状態になるとは限らないであろう。次節の芥川龍之介の小説「捨児」（大正9年）³³⁾は、まさに捨て子そのものをテーマとして、むしろ、育ての親の深い愛情を描いた作品である。夢解釈においても、単にひとつの結論が出たからといってそれに固執するのではなく、角度を変えた考察をも並行しなければならない。従って、そのような比較的考察を行う。

6. 作品「捨児」（大正9年）の考察

作品「捨児」は、ひとりの男の捨て子にまつわる話によって進行する。

浅草の信行寺という寺の門前に、明治二十二年の秋、男の子がひとり、身の上分かるものは何もない状態で捨ててあった。田村日錚（にっそう）という住職は、すぐにこの子を抱いて、勇之助と名づけて、わが子のように育て始めた。それとともに、説教の際には和漢の故事を引いて、親子の恩愛を忘れぬことが、即ち仏恩をも報ずる所以だと、懇ろに

話した。

すると、明治二十七年の冬、品の良い三十四五の女が庫裏を訪ね、蜜柑を剥いている勇之助の姿を見るや否や、和尚の前に手をつき、自分が母親だと告白し、それまでの養育の礼を述べるのである。和尚はこの子を棄てた訳を女に話させる。女の話によると、女と夫は浅草で米屋を開いていたが株で失敗して、夜逃げ同様横浜に落ちていくことになり、女に乳が出ないこともあって捨て子したというのである。横浜では運送屋に勤めて、当初うまくいき次の子どもも授かったのではあったが、夫も子どもも病気で急死、ここに至って捨てた子のことが気がかりとなって、どんなに苦しいことがあっても手元で養育したいと、訪ねてきたというのである。

女が勇之助を抱き上げて、暫く泣き声をこらえていたのを見て、和尚は実の母だと悟り、勇之助を託す。それから女は、針仕事などでつつましいながらも苦しくない生計を立てていたという。

と、語り終わって、語り手は（小説を書いている）私に、「その捨児が私です。」と告げる。

しばらくの沈黙の後、私が「阿母（おっか）さんは今でも丈夫ですか。」と聞くと、「一昨年歿くなりました。しかし——今御話した女は、私の母ぢやなかったのです。」と、彼は意外な続きを話し始める。

それは、捨て子の話は勇之助を引き取るための嘘で、戸籍などで確認したところによると、浅草にいるときに生まれたのは女の子、しかも三ヶ月で亡くなっていたというのである。恐らくは、女は和尚の説教を聞くうちに、勇之助の知らない母の役を勤める気になったと思われる。そして、「その後二十年あまりは、殆（ほとんど）寝食さえ忘れる位」勇之助に尽くしたというのである。

そして私が、実の子でないことを知ったということを母に話したのかと、勇之助に尋ねると、彼は、自分のほうから言い出すのは残酷なので話さなかったと言い、さらに次のように述べる。

「前よりも一層なつかしく思うようになったのです。その秘密を知って以来、母は捨児の私には、母以上の人間になりましたから。」

これに続いて、作者は感動的な一言を付け加えて、この物語を閉じる。

「客はしんみりと返事をした。恰も彼自身子以上の人間だった事も知らないように。」

この最後の一言が、母の無限の愛を表していることはいうまでもない。意外性を次々に提出し、その連続性を感動的かつ象徴的な一言でぐっと締めくくる芥川龍之介ならではの技法が、強い感動を呼ぶのである。この作品だけについていえば、母の無償の愛の美しさを描いていると言えるのである。もちろん現実には、このような愛は多く存在する。

では次に、この作品は、作者芥川龍之介にとってどのような心理的位置づけになるのだろうか。

前節までの考察を思い起こせば、この作品の事的内容は、一方で芥川龍之介にとって見果てぬ夢であった。その意味において、従ってむしろ、このような理想的な母子像を描くことで、彼自身の気持ちを整理し、癒しを得ようとしているとさえ思われるのである。

他方、芥川龍之介の人生において、類似の体験がないわけではない。『芥川龍之介』によれば、新原家に生まれた龍之介は、母の死後、母の実家の芥川家で養育され、十一歳になってから入籍し正式に芥川姓となるが、養育に主に携わったのは一生独身だった伯母のフキだったと述べられている³⁴。しかし、同書では芥川自身の言葉を引用しつつ「要するに善悪二様の意味で、彼に直接に影響することの深かったのはこの伯母だった」³⁵と、芥川龍之介が必ずしも全面的に感謝しているわけではないことをも述べられているのである。

また芥川龍之介自身「点鬼簿」(大正15年)で、「僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。」³⁶と述べ、さらに「僕は母の発狂したために生まれるが早いから養家に来たから(中略)僕の父にも冷淡だった」³⁷と述べる時、彼自身の中にずっと滞り続けた寂しさが存在したことは明らかである。

このように考えれば、やはりこの作品「捨児」は、作者芥川龍之介にとって見果てぬ夢を描いたものとも言える。辛い体験があったからこそ、より感動的に描くことが出来たと見えよう。

7. 結び

このように、芥川龍之介はたしかに、自分の乳児期の境遇に囚われ続けたと言える。それは、『芥川龍之介』でも「遺伝として彼の最もおそれたのは狂人の子であるということであった。」³⁸と述べられるように、母と別離した理由が、現在とは比べものにならない当時の医療環境における母の精神病にあったことが、彼の乳児期に作られた自己と全存在に対する喪失感を、他の人以上に助長、継続したと考えられる。

このように、現実の状況を顧みて、それが、夢の解釈と一致するとき、ひとつの合理的な解釈に到達したとあってよい。

そして再び、作品「夢」の、「寂しい往来をたった一人歩いていたらしかった。」「今何か起れば、それも忽ち夢の中の出来事になり兼ねない」³⁹という、不確かな存在をたった一人で歩かねばならない根源的な存在に対する不安と自信のなさを示すラストシーンを思いやるのである。この作品「夢」を発表して7ヵ月後、昭和2年7月24日、芥川龍之介は自殺した。

かくして、作品「夢」に即して行った夢解釈の試みを閉じるが、今後は、この方法をより確実なものとするためにも、他の作品の解釈を試みなければならないし、他方、芥川龍之介の深層により正確に到達するためにも、芥川作品の多様な解釈を試みなければならないと言える。

参考文献：

1. 芥川龍之介「夢」、『芥川龍之介全集 第二十二巻』岩波書店、1997年、530～540頁
2. 拙著『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』ナカニシヤ出版、2002年
3. 河合隼雄『母性社会日本の病理』講談社+ α 文庫、1997年、188～189頁
4. 『芥川龍之介全集 第二十二巻』540頁
5. 拙著『現象としての人格発達』中川書店、1992年、70～71頁
6. A.N.Whitehead, *Symbolism -Its Meaning and Effect*, University of Virginia, 1927
7. 『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』103頁以降
8. 川崎克哲『夢の読み方 夢の文法』講談社+ α 新書、2000年、73頁
9. 『芥川龍之介全集 第二十二巻』530頁
10. 『芥川龍之介全集 第二十二巻』538頁
11. 『芥川龍之介全集 第二十二巻』530頁
12. 『芥川龍之介全集 第二十二巻』539頁
13. 『芥川龍之介全集 第二十二巻』539～540頁
14. 『芥川龍之介全集 第二十二巻』540頁
15. 『芥川龍之介全集 第二十二巻』532頁
16. Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Pb.Co., 1974
/1976, p.131
17. 河合隼雄『ユング心理学入門』培風館、昭和42年/昭和49年、182頁
18. 『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』123頁
19. 『夢の読み方 夢の文法』75頁
20. 『芥川龍之介全集 第二十二巻』以上537頁
21. 『芥川龍之介全集 第二十二巻』以上539～540頁
22. 『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』110～111頁
23. 『人格発達と癒し ―昔話解釈・夢解釈―』120頁
24. E.H.Erikson, *Identity and the Life Cycle*, Norton, 1959/1994, p.53～57
25. *Identity and the Life Cycle*, p.57
26. *Identity and the Life Cycle*, p.58

27. 拙論「芥川龍之介と親鸞 — 『蜘蛛の糸』の親性をめぐって—」、『比較思想論輯 — 比較思想学会福岡支部紀要— 第5号』2003年、縦1～7頁
28. 吉田精一『芥川龍之介』新潮文庫、昭和33年／平成6年、9～10頁
29. 関口安義『芥川龍之介とその時代』筑摩書房、1999年、7頁
30. 芥川龍之介「侏儒の言葉」、『芥川龍之介全集 第十三卷』岩波書店、1996年、74頁
31. 『芥川龍之介全集 第十三卷』73頁
32. 『芥川龍之介全集 第十三卷』74頁
33. 芥川龍之介「捨児」、『芥川龍之介全集 第六卷』岩波書店、1996年、282～290頁
34. 『芥川龍之介』16～17頁
35. 『芥川龍之介』17頁
36. 芥川龍之介「点鬼簿」、『芥川龍之介全集 第十三卷』岩波書店、1997年、234頁
37. 『芥川龍之介全集 第十三卷』239頁
38. 『芥川龍之介』274頁
39. 『芥川龍之介全集 第二十二卷』540頁

付記：

この論文は、平成16年度本学奨励研究の一環として出版される荒木正見編著『芥川龍之介の癒し』（仮題、2005.3刊行予定）の筆者分担分の章を執筆するための基礎研究であり、奨励研究の成果公表の一端である。関係各位に感謝申し上げます。